

古い家などを大胆に改装し、個性的な住空間によりみえらせるリノベーション。その草分けが設計事務所、ブルースタジオ（東京・中野）の専務で建築家の大島芳彦さん（48）だ。住まいの再生を通じ、人のつながりをつくるのが大島流のリノベだという。

こんな依頼がありました。母親が亡くなり実家が空いた。自分は住まないが思い出の家を壊したくない……。そこでシェア



ハウスにリノベしました。お母さんの趣味だった絵も飾り、中庭に新設した木のデッキに皆が集う。古い日本家屋は、他人同士が家族のように暮らす舞台にぴったりです。

神奈川県座間駅前の「ホシノタニ団地」は元社宅です。部屋の改装だけでなく、敷地を囲む塀を取り払いカフェや育児支援施設、菜園を設けました。若い夫婦が移り住み、近所の人たちも集まる場に。夫婦は将来、地

リノベで人つなぐ

おおしま よしひこ
大島 芳彦さん
ブルースタジオ
専務・建築家



老朽化する建築物 時代に合わせ再編集

域の戸建てに定住してくれるかもしれない。

郊外のアパート再生では、隣の駐車場をつぶし私設の公園として開放してもらいました。しかも地域の人たちの手づくりです。引退した大島さんが「危なっかしくて見てられねえ」などと名乗り出て大活躍。こうしたコミュニティの存在は、そこにある家の価値も上げます。リノベは、奇をてらったデザインで付加価値を足す作業ではありません。先人が作った建物

や歴史、地形の潜在価値をくみ取り、時代に合わせて見える形に編集し直す作業です。それが僕らの役割だと考えています。

リノベ事業を始めたのは2000年、30歳の時。まだリノベーションという言葉が世で使われていなかった頃だ。父の経営する不動産会社が所有しているマンションに借り手がつかず、建築設計事務所に勤めていた私に「プロなら知恵を貸せ」と相談があったのです。貸家業や不動産業が順風満帆だ

った時代は、バブル崩壊で終わっていました。

築約40年で広さ10坪（33平方メートル）、暗い台所を和室2部屋がはさむ団地風の間取り。給湯器も備え、完成当時は最先端だった部屋に家族4人が暮らしたそうです。普通なら台所をきれいにし、畳をフローリングに換えセキュリティを整備しておしまいでしようが、それではダメだと思いました。

今の時代、この広さなら単身用。「2K」を「1LDK」に間取りから改造しました。内装もそっくり変え、友人のアーティストや写真家を呼んで家具やアートを置き宣伝用の写真を撮影。約150万円を投資した結果、月8万円台でも住む人がいなかった古い部屋に、最盛期と同じ12万円台で新たな借り手がついたのです。

周りを見ると、戦後から高度成長期に建った貸家や賃貸マンションが老朽化し、大家さんたちは同じ悩みを抱えている。これは社会問題ではないか。建築家の使命のひとつは社会課題の解決だ。リノベという手法の持つ意味に気づいた瞬間でした。

（編集委員 石鍋仁美が担当します）